

末松謙澄が『源氏物語』を  
英訳した話

奥 正敬

■はじめに

現在、紫式部が著した『源氏物語』は外国の人たちによって多くの言語に翻訳され、日本の王朝文化を理解する文学作品として世界に広まっています。しかし、この古典の世界進出の嚆矢となったのは紛れもなく日本人の翻訳で、その訳者の名を末松謙澄すえまつけんちやう（1855-1920）といいます。彼は明治時代がまだ半ばにも達しない時期にイギリスに滞在して、この物語を英語化して刊行しました。その後も彼は翻訳家や文学研究者の域に留まらず、日本の発展に関わる幅広い仕事を成し遂げることになります。

■伊藤博文に認められた文才と英語力

謙澄は安政二（1855）年に豊前国（現在の福岡県）で庄屋の子として生まれましたが、この年は日米和親条約が批准され、日本が実質的に国際社会に仲間入りをした年でした。時が明治に移り10歳になる頃から漢学や国学を学びはじめ、明治四（1871）年に上京したといえます。

東京では参議や司法大輔を務め「土佐の三伯」の一人とされた佐々木高行邸に書生として住み込み、縁あって後に総理大臣となる高橋是清に出会います。二人は懇意になり、謙澄は滞米生活の長かった高橋から英語を学び、逆に高橋には漢字を教えたといわれています。

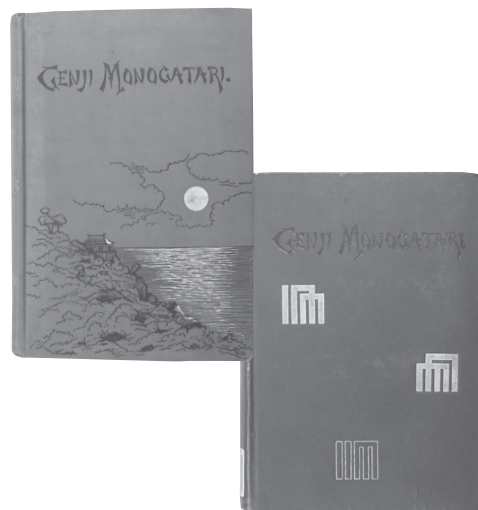
明治五（1872）年には末松は東京師範学校へ入学しますが、同年に退学して東京日日新聞へ記事売り込むことで生計を立てていました。しかし、その才能を見込まれて明治七（1874）年にはこの新聞社の記者になります。ここで、社長の福地源一郎から紹介された伊藤博文に認められ、太政官の官吏として黒田清隆のもとで働きはじめました。大きな仕事は日朝修好条規

の草案作りや、西南戦争下での山県有朋の秘書官として西郷隆盛への降伏勧告文の起草などで、国家の重要な局面において大いに健筆を揮いました。特に伊藤からは、こののち、人生を決定するほどの厚遇を受けていきます。

西南戦争後の明治十一（1878）年にはイギリス留学を命じられ、ロンドン駐在の公使館一等書記官見習いとして赴任します。しかし、1880年にはこの職を離れてケンブリッジ大学へ入学し、1884年に文学士と法学修士号を得て卒業したといわれています。

■後世の研究者が称賛する『源氏物語』

謙澄が在学中に翻訳、刊行したのが本稿の冒頭にご紹介した『源氏物語』でした。この書物の英文書名は、“Genji monogatari: the most celebrated of the classical Japanese romances”（写真）で、ロンドンのトリュブナー（Trübner）社から1882年に出版されました。頁立ては序文等が16頁で、本文は253頁からなり、大きさは縦20センチで作られています。内容はこの物語の一帖の「桐壺」から十七帖の「絵合」までが英訳された抄訳ですが、世界に紹介された初めての『源氏物語』です。



写真左上は1882年にロンドンで刊行された初版。右下は1894年に横浜で出版されたもの。（本学図書館所蔵）